# ラテン語とフランス語 5

名言・金言による比較言語学

秋山 学

今月は生まれながらの天才詩人，オウィディウス（B.C. 43–A.D. 17）の言葉に触れようと思います．彼はスルモー（現スルモナ）に生まれ，ローマとアテナイで修辞学を修めました．一時期官職に就きますが，『恋の歌』（B.C. 20），『名婦の書簡』（13），『恋愛技法』（1）などを発表し，恋愛詩人として名声を獲得します．続いて『変身物語』（A.D. 2–7）や『祭暦』（2–8）など大作の執筆に取りかかり，活躍の絶頂期を迎えますが，8年，突然皇帝アウグストゥスの逆鱗に触れ，黒海沿岸トミス（現ルーマニア領コンスタンツァ）への流刑に処せられます．その正確な理由は不明ですが，皇帝の孫娘ユリアとの浮いた噂が皇帝の憤りを招いたとも，『恋愛技法』のような著作が，ローマ古来の良き習俗への復古を目指す皇帝の怒りを買ったとも伝えられます．なおオウィディウスは，ローマへの帰還を願って幾度も嘆願の書簡を認（したた）めますが，結局これは容れられず，流刑地で没することになります．トミスで著された二つの作品『悲歌』（9）と『黒海からの手紙』（13）は，オウィディウスの活動の第3期を画す静寂に満ちた佳作です．

さて今回は，オウィディウスの主著『変身物語』（Metamorphoses）第4巻から「ピュラムスとティスベー」の一節を読んでみましょう．この作品はギリシア・ローマ神話の集大成として知られ，特に文芸復興期の文学，絵画・彫刻や音楽など様々な分野に影響を及ぼしました．第1巻は「世界の始まり」そして「人間の誕生」から起こされ，ギリシア神話の主なものをほぼすべて網羅しつつ，最終第15巻では皇帝カエサルの神格化を唱って詩人の同時代にまで及びます．全巻に散りばめられた物語の数は総計約250，主人公は特に設定されることがなく，「変身」が全巻のモチーフとなっています．「変身」とは，神話の登場人物が主として神々の働きかけにより，動物や鳥，花などに姿を変えられることを指していますが，このテーマは，ギリシア神話のなかでは元来それほど目立つものではなく，オウィディウスの独創と言ってよいでしょう．

「ピュラムスとティスベー」の物語は，第3巻から始まる「テーバイ譚」の中で，バッコスの祭への参加を拒み，機織りに精を出すミニュアスの娘たちが語る，最初のお話です（第4巻．55–166）．バビロンの都に育ったこの美青年と美少女は，住まいが隣同士という間柄から相思相愛の仲となり，周囲が反対する中，家の壁越しに愛を育みます．ある夜，2人は市壁の外にあるニノス王の墓で落ち合おうと約束しますが，早めに到着して恋人を待つティスベーの目に1匹の雌獅子が映り，彼女は洞窟に逃げ込

みます．その際に被っていたベールが落ち，雌獅子は，牛を食んだばかりの口でそのベールを赤く染めて去ってゆきます．そこへピュラモスが到着し，鮮血に染まった恋人のベールにその死を確信し，遅れた自分を責めます．彼は携えていた短剣で己が身を刺して果て，その血は，もともと白かった桑の木の実を赤黒く染めます．戻ってきたティスベーは変わり果てた恋人の姿に嘆き伏し，その短剣に身を重ねる，という筋で，「変身」のモチーフに連なるのは，桑の実がその色を変じたという点です．

この「話中話」的な美しい悲恋物語は，たとえばシェイクスピア（1564–1616）による『真夏の夜の夢』や『ロミオとジュリエット』など，後世多くの作家に影響を及ぼすことになります．なおミニュアスの娘たちは，続いてもう二話物語を聞かせたあと，遂にバッコス神の怒りを身に受け，コウモリへと変身させられます（cf. IV. 415）．

以下に引くのは，先に逝った恋人の後を追うティスベーの言葉です（IV. 151–153）．

［原文］persequar extinctum letique miserrima dicar / causa comesque tui; quique a me morte revelli / heu sola poteras, poteris nec morte revelli. /
［仏訳］Je te suivrai au-delà de cette vie; on dira que j'ai été la cause déplorable et la compagne de ton trépas; la mort seule, hélas! Pouvait t'arracher à moi; tu ne pourras plus m'être arraché, même par la mort.
［拙訳］わたくしは息絶えた貴方の後を追いましょう．そしてわたくしは哀れにも，貴方の死の理由また道連れとも言われましょう．わたくしから，ああ！ ただ死だけによって引き離されえた貴方が，死をもってしても引き離されえなくなるように．

原文 1 行目末尾には ‘dicar’（言われる）と受動未来形が用いられていますが，仏訳では 3 人称の一般人称を主語に，能動形となっています．「わたくし」（ティスベー）は（ピュラムスの死の）‘causa’（理由）そして ‘comes’（道連れ）となるため，これら主語と同格の名詞が主格に置かれたまま，1 人称の受動形 ‘dicar’ が述部に据えられるのです．

それから，オウィディウスによる言葉のテクニックにも注目しましょう．原文 2, 3 行目はともに ‘morte revelli’ という行末になっています．仏訳が ‘la mort’ で始めかつ終えるという「囲い構造」‘inclusio’ で対処しているあたり，苦労がうかがえますね．また韻律上，たとえば原文 3 行目途中のコンマの位置には，多く caesura と呼ばれる「句切れ」が来ますが，この caesura を挟んで，‘posse’（できる）の未完了過去形（poteras）と未来形（poteris）が対置されていて，語順の定まった仏語では訳出不可能な技法が披露されています．ラテン詩法の可能性を極限まで追求したオウィディウスの技量は，この一節からも十分に感じ取ることができるのではないでしょうか．

（あきやま・まなぶ）